**限界費用ゼロ社会（**[**The Zero Marginal Cost Society**](http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00HY09XGQ/ref%3Doh_aui_d_detailpage_o03_?ie=UTF8&psc=1) **by Jeremy Rifkin）**

1. **市場資本主義から協働型コモンズへの一大パラダイムシフト**
2. **資本主義の語られざる歴史**

**第四章　資本主義のレンズを通して眺めた人間の本性**

[**柴田裕之訳本**](http://www.amazon.co.jp/gp/product/B0178FVSWS/ref%3Doh_aui_d_detailpage_o04_?ie=UTF8&psc=1)**を下訳にして改訳　rev.1　齋藤旬　20160121**

各産業における少数のcorporateへの経済力集中に関して最も注目すべきなのは、それが19世紀と20世紀に一般の人の苦悩を、少なくとも米国内ではほとんど引き起こさなかった点だ。労働組合はcorporate powerと激しく闘ったが、その目指す所が労働者の大多数を惹きつけることはついぞなかった。ときおりpopulistが立ち上がって、社会の経済生活を傍若無人に支配するcorporateに楯突いてきたし、最近では、the 99 percent versus the 1 percentというスローガンを掲げたthe Occupy Movementの例が挙げられるが、その様な憤懣の爆発は概して非常に稀で、権力集中の抑制にはほど遠い、生ぬるい規制改革に繋がるだけだった。

こうしたcorporate批判が抑えられていたのは、一つには、これらlarge vertically integrated corporate enterprisesが、ますます安価なproducts and servicesを市場にもたらすのに成功し、無数の雇用を生み出して、the industrial world（産業地上世界）において労働者の生活水準を向上させたからだ。

だが実はそれに加えてもっと微妙な要因が作用しており、これまた効果的に大衆の反発を未然に抑えていた。それは、第一次・第二次産業革命（齋藤補遺：蒸気機関産業革命・corporate産業革命）がもたらした包括的なworldview（地上世界観）であり、現行の経済体制の働きはnature（齋藤補遺：無冠詞のnature）そのものの在り方を反映しているので非の打ち所がないと主張することによって、このeconomic systemをlegitimizeする見方だった。

**救済（salvation）という概念の見直し**

　ある経済パラダイムをlegitimizeするために、そのパラダイムに見合った壮大なcosmology（宇宙秩序観）の物語（narrative）を創作するということが昔から行われてきた。或るcosmology（宇宙秩序観）を組み立てて既存の社会秩序をlegitimizeする手法の好例として現代の歴史家が挙げるのが、封建時代において被造物をa Great Chain of Being（存在の大いなる連鎖）としたSt. Thomas Aquinasの説明だ。natureの適切な働きは、Godの創造物に課された様々なobligationsが織りなすa labyrinth（一種の迷路）に依存するとAquinasは主張した。被創造生物たち（creature）はそれぞれ知性とcapabilities（尊厳行為能力）が異なるものの、その様なdiversity and inequality（多様性と不均衡）は、全体systemが秩序を持って機能するためには欠かせない。もしも全ての被創造生物たちがequalならば、他者の役には立てないとSt. Thomasはreasonした。Godは個々の被創造生物に違いを持たせることで、natureにobligationのhierarchyを確立し、そうしたobligationが忠実に遂行されれば、the Creationの繁栄が可能になった。

　God’s creationに関するSt. Thomasのこの記述は、封建社会の成り立ちそのものだと言って良いほどに似ている。即ち封建時代、皆にとって各自の生き残りは、厳密に規定された社会的hierarchyの中で全員がそれぞれのdutyを忠実に果たすことにかかっていた。農奴や騎士、領主、教皇はみな、程度や種類に違いはあるが、封建制の忠義の絆によって他者に奉仕することがobligationであるとされていた。各自がhierarchy内の位置づけに従ってdutyを果たせば、それは、God’s creationとしてのthe perfection（齋藤補遺：新約聖書でパウロが言うところの「自己の完成」）を尊重していることと見なされた。

　ミネソタ大学の歴史学者の故Robert Hoytは、封建社会の構成とthe Great Chain of Beingとの鏡像関係を次の様に要約している。

この基本的考え方、即ち、創造された宇宙はhierarchyを成しており、その中であらゆる被創造生物はproper（そのものにとって本来的）な階級と持ち場を割り当てられているという考え方は、封建的hierarchyの中で特定のrightsとdutiesが付随する相応な階級に誰もが属するという封建的概念とうまく合致した。[[1]](#footnote-1)

　中世後期のsoftな（齋藤補遺：particulateな、その意味は「分野ごとに縦割りで未だ包括的になっていない」）原初的産業革命に伴って起きた宗教改革のcosmology（宇宙秩序観）も同様に、或る経済的パラダイムをlegitimizeする役目を果たした。Martin Lutherは、the Great Chain of BeingというCatholicの観念を真っ向から攻撃した。即ちこの観念によって、pope（教皇） とpapal administration（教皇による執政）の堕落したhierarchy的支配が信者達の生活に及ぶことをlegitimizeしていると主張した。このProtestant神学者は、Catholicの封建的cosmology（宇宙秩序観）に代えて、Christと各信者とのpersonal relationshipを中心とするworldview（地上世界観）を据えた。この様なworshipのdemocratizationは、the new burgher class（新興市民階級）をempowerしつつあった新たなcommunication / energy matrixにうまく合致した。

　Lutherは教皇をthe Antichristだとして糾弾し、次の様に警告した。Catholic教会はGodに選ばれた地上の使者でもなければ、信者とthe Lordとの対話を取り持つ聖別された仲介者でもない。また、教会の指導者は、教区民の代わりにGodにとりなすpowerをlegitimatelyに保有していると主張することもできないし、the next worldにおける救済を請け負うこともできない、と。

　その代わりにLutherは、the priesthood of all believers（万人司祭）を求めた。それぞれの男も女も一人でGodの前に立つ。全Christianはめいめいが聖書を携え、the word of Godを解釈し、church authority（教会権威）に依存せずに聖書の文章をdecipher（謎解き）し、heavenへの門番の役割を担うpersonal responsibilityを持つ。Lutherのこの様な説諭（admonition）は、世界史上初の大衆識字能力向上運動を引き起こした。即ちProtestantに改宗した人々は、God’s word in the Bibleを解釈するために、読書術を速やかに習得した。

　Lutherは救済に関するruleも変えた。長い間the churchは、performing good worksとreceiving the church’s sacraments（秘蹟）とによりheavenでの居場所を確保する助けになると信者に教えてきた。これに対しLutherは、信者がEarth（地上世界）においてgood worksを積んだところで、heavenでの居場所は勝ち取れないと主張した。Lutherによればむしろ、人（one）の最終的な運命はget-go（最初）から定まっている。人はそれぞれ救済されるべく選ばれているか、地獄に落とされるか、Godによって誕生時に定められているというのだ。しかしそうなると疑問が生じる。人は何が自分を待ち受けているのか分からないという恐ろしい不安を抱えながら、どう生きていけばよいのか？　Lutherはこう答える。自らのcalling for life（生涯の召命、天職）を受け入れ、堕落せずに自らの役割をfullに果たせば、それこそ自分が救済されるべく選ばれているという印になるだろう、と。

　Jean Calvinはもう一歩進めて、彼に付き従う人々に呼びかけ、選ばれし者である可能性の印（a sign of possible election）として、自らの運命（lot in life）を向上させるために絶え間なく努めるよう求めた。男も女も各個人のcalling（召命）に励むようにduty-boundされていると強く主張することにより、はからずもこれらProtestant神学者達は、新たな起業家精神を神学的に支持することになった。なぜならば、Godやthe natural orderとその人本来（one’s proper）との関係性が反映されて、経済的運命が改善されるという前提が暗示的に示されたからだ。

　無論LutherにもCalvinにも、信者達をdespiritualize（spiritualではないものにする）したり、*homo economicus*（合理的に利益のみを追求する人間）を作り出したりする気など全くなかった。しかし、召命に励むという考えはやがて、経済的豊かさを増すことと区別がつかなくなっていった。彼らが強調したdiligence, hard work, and frugality（勤勉、努力、質素倹約）は、16世紀17世紀と時を経るにつれ、経済的意味合いの濃い”more productive”（より生産的）という言葉へと変貌を遂げた。自らの価値（self-worth）は、Godの目から見てgood characterを持つことよりはむしろ、新たな市場交換経済（market exchange economy）においてproductiveであることで得られるものとなった。

　each personがthe Lordとともに一人で立つという考えは、やがて、each personはmarketplaceの中に一人で立つという考えに取って代わられ始めた。そして、self-worthは私利の追求の程度で測られ、その私利の追求の程度は、新たな市場経済での抜け目のない取引による資産と富の蓄積によって測られる様になった。Max Weberは、この様な新たな市場の申し子を生み出した過程を、”the Protestant ethics“[[2]](#footnote-2)（の作用）と呼んだ。

**人間の本性についての啓蒙主義の見解**

　18世紀後期にsoftな（particulateな）原初的市場経済時代が終焉を迎える頃には、新たなcosmologyが現れ始め、それが、新たな市場の申し子達に包括的なnarrativeをもたらし、その勢いがあまりにも強かったので、the Christian cosmologyは更に歴史の隅へと追いやられることになった。

　そうした流れの急先鋒となったのは、啓蒙主義の偉大な哲学者John Locke（1632-1704）だ。彼は、私有財産（private property）を熱心に擁護した。私有財産の追求は、封建時代のcommonsの共同管理（communal management）よりも、人間の”inherent nature”（生まれながらの本性）をより正確に反映すると主張した。Lockeは、each personがnatureの原材料に自らの労働を加えてvalueあるものに変えることで、それぞれ自分自身の財産を生み出すと論じた。Lockeは、the primal state of nature（原初的自然状態）ではthe Earthの一切のものが人類とその同胞たる被創造生物達に共有されることを認めはしたものの、著書の『市民政府論（統治二論）1690年』で、each individualsが「自分自身の*person*という財産を有し、［なおかつ］本人以外は誰一人としてこれに対するrightを持たない[[3]](#footnote-3)」と説明している。Lockeの主張によれば、private propertyはa natural rightであり、それゆえ、如何なる形で否認されようとも、この否認は、the natural order of thingsを拒んでthe laws of natureを否定するのと同じだった。

　Lockeは次の様に論じている。

従って、natureがもたらしそこに残した状態から人が取り出すものであれば何でも、その人はそれに自らの*labor*を混ぜ合わせ、所有するものを加え、結果、それを自らの*property*とする。即ち、natureがそれをcommon stateに置いた後に人が取り出し、その人の*labor*によって何かが付加されると、他の人々のthe common rightは排除される。なぜならばその人が加えた*labor*は、the labourerの疑いようのないpropertyであり、ひとたび何かが付加されたものに対するa rightは、本人以外に誰も持つことは出来ぬからである。少なくとも、他の人々にも十分に、同じくらいにgoodなものがin commonに残されている限りは。[[4]](#footnote-4)

　それからLockeは、private propertyに対するnatural rightについての持論を用いて、the commonsにおけるproprietary obligation（占有義務）に基づく封建時代財産体制（the feudal property regime）を非難した。

自らのlabourによって土地をappropriate（専有）する人は、人類のcommon stock（共有備蓄）を減らすのではなくむしろ増やす。というのも、人間の生活を維持するための食糧でいえば、囲い込まれて開墾された1エーカーの土地から産出されるものは･･････同じくらい肥沃でもin commonにあって荒れたままになっている1エーカーの土地から産出されるものよりも10倍も多いからだ。それ故、人が土地を囲い込んで、10エーカーから生活に大きなconveniences（利便）を得て、更にそれが未開墾の100エーカーからの産出量を上回るならば、その人は人類に90エーカーを提供したと言って差し支えないだろう。[[5]](#footnote-5)

　Lockeがこの小論で明確に述べたのは、当時出現しつつあったcosmologyのnarrativeであり、これがやがて近代的な市場経済に随伴することになる。The natural order of thingsは、キリスト教のGreat Chain of Being（存在の大いなる連鎖）には最早見いだされず、額に汗して働くことでprivate propertyを生み出すnatural rightの中に見つかるのだった。

　Adam SmithはLockeのすぐ後に続いた。Smithは封建時代のcommonsで営まれるcommunal lifeを最終的に否定する際に、marketでの振る舞いが人々の真の本性を示すのだと力説した。彼は次の様に書いている。

every individualが、自らの意のままに出来る様々なcapitalの最もadvantageousな使途を見つけ出そうと、絶えず努力している。確かに、当人の眼中にあるのは自らのadvantageであって社会のadvantageではない。にもかかわらず、自らのadvantageを探求することで、naturallyに、あるいはむしろ必然的に、その社会に最もadvantageousな使途をevery individualが選択することになる。[[6]](#footnote-6)

　社会批評家のR. H. Tawneyは、European社会を、封建経済から市場経済へ、神権政治的worldviewから経済的worldviewへ、移行させた重大な変化について、後にこう書いている。キリスト教中心のuniverseが崩れた後に残されたのは、「private rightsとprivate interestsであり、社会そのものではなく社会のmaterials（素材）だ」。これ以降、市場経済でやり取りされるprivate propertyが「社会的組織（organization）の依って立つべき基礎であると当然の様に見なされ、それに関して更なる議論は一切認められなかった[[7]](#footnote-7)」。Max Weberは一層辛辣で、キリスト教中心のuniverseから物質主義のuniverseに転換する際に、spiritual valuesがeconomic valuesに取って代わられたのは、”the disenchantment of the world”[[8]](#footnote-8)（この世地上世界の脱呪術化）に他ならないと主張した。

　fairに言えば次の様に言える。the commonsを囲い込み、何百万もの農奴を先祖代々の土地から引き剥がし、彼らの労働力を吸収する用意が未だ出来ていない新たな都市での自活を強いたことで、人々は苦境に陥り甚大な犠牲を払わされたとはいえ、市場経済への転換は結果的に、封建時代のcommonsで暮らしていた家族には想像もつかなかった形で、平均的な人々の境遇を改善した。

　中世後期における純粋な市場交換経済が、19世紀後期までにcapitalist economy（資本家経済）に移行すると、propertyの概念に関して深刻な問題が生じた。a personが自らのlabourによってnatureに付加したものは、private propertyの形で本人のみのものとなるというLockeのnatural right理論を思い出して欲しい。Lockeの理論は、中世後期の単純な市場交換経済にはよく当てはまる。なぜならば当時、marketplaceで売買されたものの事実上すべてが、individualやfamilyによる労働の産物だったからだ。

　ところが、資本主義の到来はこの経済モデルを根本的に変えた。先述した様に、職人は道具や工具を資本家に奪われ、free laborers（自由労働者）に仕立てられ、賃金の形で、費やした労働の一部しか取り戻せなかった。その他、生産物に投入された労働価値の残りは、利益の形でthe companyが手に入れた。ownership（所有）もtransformした。新たな所有者はshareholder investorであり、彼ら自身のlaborは生産物には一切投入されておらず、しかもthe companyの経営に対する発言権が皆無かそれに近いにもかかわらず、the workersの剰余労働から奪い取った利益の配当を受け取る。ジレンマは明らかだ。この様なworkersは、自らのlaborで生み出した製品を余すところなく所有したり処分したりするnatural rightを奪われているのだろうか？　資本は蓄積されたlaborであるが故にinvestorsはより間接的な意味では自らの過去のlaborをその生産過程に”adding”していると主張して、workersの剰余労働の価値を強奪することをjustifyする動きもあった。しかしそうしたjustificationは根拠薄弱に思われたため通用しなかった。歴史学者のRichard Schlatterは次の様に鋭い指摘をしている。

古典学派の前提は、laborがpropertyをcreateしたというものなので、矛盾の無い経済理論を組み立てることによって、workingせずに利益を得る者は必然的に該workmanを搾取（robbing）しているという結論を回避することは出来なかった。[[9]](#footnote-9)

　1840年代になると、過激な社会主義者の声が合わさって、ヨーロッパ全土で勢いを増していった。そうした社会主義者達はこの古典学派の矛盾に目をつけた。この矛盾で、古典派経済学理論を資本主義から離反させることが出来ると踏んだ。そこで社会主義者達は、資本主義を邪道として厳しく批判する一方、each individualsが自らのlaborの成果を全て自分のものと出来るnatural rightを持つという古典派経済学理論の主張を賞賛した。

**功利主義の理論**

　経済学者達は、この様な離反を避けようと決意した。即ち、芽吹いたばかりの資本主義と古典派経済理論との間を埋める新理論を打ち立てることに大至急で取りかかる一方、private propertyに関するLockeのnatural rights theoryはうち捨てて社会主義者達の為すに任せることにした。彼らは、David HumeとJeremy Benthamのutilitarian value（功利主義的価値）の理論にその解決策を見いだした。Humeによれば、property（法律用語で「所有権」）とは、each manを「他者と協力させ、public utilityに資する行動全般の計画や体制へと」[[10]](#footnote-10)導くcommon interestから生じた、a human convention（人間の慣習）であるという。つまり、the laws of property（所有権法）は、human beingsのcommon interestのためにあるのだから、human beingsが同意し従うべきcodes（慣習法）であるということだ。

　Hume（1711-1776）は、a manがnatureから作り出したものはそのmanのものであるという考えを支持する立場を明確にした。その一方で、private property rightsが推奨されるべきなのは、それがnatural rightsに基づいているからでなく、”*useful* habits”（有用な慣習）だからであり、property（財産）がfreelyにmarketplaceで交換されるべきなのは”so *beneficial* to human society”（人間社会にとって非常に有益）だからであると主張した。[[11]](#footnote-11)

　功利主義者達は、the general welfare of society（社会全般の福祉） --- 即ち苦痛を最小化し喜びを最大化して追求すること（defined as the pursuit of pleasure over pain） --- これが、財産に関する一切の取り決めの基本だと主張した。この考え方により、労働者が生産物をprivate propertyとすることを制限し、資本に組み込まれるthe property rightsを擁護するという二点を両方ともjustifyできるとし、どちらの財産の形態もthe general welfareを増進し、それ故にuseful（有用）だと論じた。いずれの場合にも、これらのpracticeをjustifyするのはutility（功利性）のみである。

　Bentham（1748-1832）はもう少し積極的に、the natural rights theory of propertyに真正面から取り組んだ。そもそもnatural propertyなどというものは存在しないと主張し、次の様に説明した。

従って、rightsはthe law（ドイツ語で言うrationale Recht、合理的Recht）の、それもthe lawのみの果実である。そもそもlaw（ドイツ語で言うRecht）無くしてrightsは無いのだから、the law（rationale Recht）に反するrightsは無い、即ち、law（Recht）に先立つrightsは無い。･･････propertyとlaw（Recht）は相携えて生まれるのであり、また相携えて滅びるより無いのだ。[[12]](#footnote-12)

　（齋藤補遺：つまりBenthamは、the law（rationale Recht）はlaw（Recht）の部分集合に必ずなる、と考えていた。しかし実際はそうならない。即ち、Rechtに含まれないrationale Rechtが作られてしまう。これを人類は過去何度も経験済みだ。）

　この功利主義法理（utilitarian doctrine）は、新たな産業経済におけるdominant forceたる資本家達の増大する役割をjustifyする際に、頼みの綱となった。それでもなおthe natural rights theory of propertyは影響力を保ち続けた。特に、この産業経済の下で工場や販売現場に流れ込む大勢のworkersにとって、また、巨大資本の時代に入っても（縮小したかもしれないが）引き続き重要な役割を果たす零細な職人達や小規模事業者達にとって、the natural rights theory of propertyは影響力を保ち続けた。

　また、功利性の法理（the utility doctrine）は、表向きは自然法則でなく社会的慣習に基づいていたにもかかわらず、Charles Darwin（1809-1882）の後押しを、彼が意図したことではないが、受けることになった。Darwinは二番目の著書*The Descent of Man*『人間の進化と性淘汰』で、human beingsはmental facultiesを進化させてconscienceの発展を生み出し、このconscienceの働きによって、the greatest good for the greatest number（最大多数の最高good）を擁護する功利主義的原理を次第に忠実に守る様になったと主張した。経済学者達はDarwinのこの深い考えから、自分達が唱える功利主義には「natureからのsupport」が得られたという自信を持ってしまった。

　当然ながらDarwinは不満だった。自分の進化論が盗用されたと感じた。実のところ彼は、人類という種（しゅ）が持つ功利的性質は、ずっと高次のもの --- 人々の間での共感の拡がりとcooperationを促すもの --- だと主張したのであって、自分の洞察が、物質的私利を集団的に追求することのlegitimizeというもっぱら経済的な目的に狭められたのを知って、激怒した。もっともな話だ。Darwinは最後の著作で、John Stuart Millら、よく知られた功利主義経済学者達に異議を申し立て、「衝動（impulse）は決して常に･･････pleasureへの期待から生じるわけではない。」[[13]](#footnote-13)と述べた。この自説を裏付けるために、自らのpersonal riskを顧みず、報酬を全く期待せずに、見知らぬ人を助けようとして火の中に飛び込んだa personの例を挙げた。Darwinは、他者を救助する動機付けはpleasureよりももっと深いhuman impulse --- 彼がthe social instinctと呼んだもの --- から生じると主張した。[[14]](#footnote-14)

　Darwinの理論のこの様なmisuse（誤用）は、the utility theory of property（財産権の功利性理論）を補強する上で、目に見える効果をあげた。しかしそれにも増して悪質で影響が大きかったのは、社会学者・哲学者Herbert Spencer（1820-1903）だ。彼はDarwinの自然選択説を大々的に転用し、後にSocial Darwinism（社会進化論）と呼ばれる説を提唱した。それは、19世紀後期の世界を席巻した資本主義による行き過ぎた行為の内でも最悪のものをjustifyするべく、ideologicallyにinspireされたものだった。SpencerはDarwinの自然選択の記述に飛びつき、自らのthe theory of economic evolution（経済進化論）をjustifyした。Spencerは、「ここで私が機械論的用語で表現しようとしてきた”survival of the fittest”（最適者生存）は、Mr. Darwinが『自然選択、あるいは、生存競争で有利な種の保存』と呼んだものだ。」[[15]](#footnote-15)と書いている。”*survival of the fittest*”という用語はDarwinが作ったと広く信じられているが、実際には、Darwinの著作を読んだ後にSpencerが思いついたものだ。ただ残念なことにDarwinは、1869年に出版した*The Origin of Species*『種の起源』第五版にSpencerの説を盛り込んでしまった。「生存競争において、形態、体質、本能の面で何らかの優位性を持つ種が保存されることを、私はNatural Selectionと呼んでいるが、Mr. Herbert Spencerは同じ考えをthe Survival of the Fittestと見事に表現した。」[[16]](#footnote-16)とDarwinは書いてしまった。この用語の含意をDarwinは、「局所的短期的環境に向けてbetterに設計された」[[17]](#footnote-17)というmetaphorだと考えたのだが、Spencerはこの用語をthe best physical shape（最良の身体的特質）という意味で用いたのだ。

　Spencerの手にかかると*survival of the fittest*は、最適な生命体だけが生き残るという意味になった。Spencer自身は、進化について遙かにLamarckian（齋藤補遺：獲得形質の遺伝）に傾倒していたにもかかわらず、臆面も無くDarwinと自分が同意見であるかの如く振る舞い、*survival of the fittest*という用語を人々の日常会話の中に強引に引き込んだ。

　後にDarwinは、*survival of the fittest*という用語から徹底的に距離を置こうとして、これを用いたことを謝罪さえしたが、徒労に終わった[[18]](#footnote-18)。この用語は人々の意識に強く刻みつけられ、以降の世代にとってDarwinの理論を特徴付けるものになってしまった。

　Spencerの論によれば、このuniverseに存在する全ての構造は、一様で単純な状態から、様々な部分が分化し多様に複雑化を進めながらも統合を保ちつつ進化を進めるという。この過程は、銀河の中の恒星や地球上の生物にも、また、人間の社会的組織（social organization）にも等しく当てはまるものだった。

　Spencerは、marketplaceにおけるfirms間の競争を社会の自然な進化的発展の表れと見なし、政府介入の無い競争が許されるべきだと考えた。その意図は、最も進化を遂げたcomplex and vertically integrated companiesだけが生き残り繁栄することを確定させることだった。

　Spencerの見解は、19世紀後半に生まれた営利事業体（the business interest）をlegitimizeするのに役だった。companiesが、合理化・中央集権化をより一層進めたmanagementにcontrolされ、ますます巨大なvertically integrated enterprisesへと変貌を追い求めるa rationale（一つの根拠）をnatureの中に見いだすことによって、Spencerと彼に続くfree-market支持の経済学者達は、地上世界に表れたこのeconomic arrangementsに対する深刻な反対意見をことごとく抑え込んでいった。

**協働型コモンズ、新経済パラダイム**

　Spencerと彼の支持者達の誤りは、社会が一層複雑化すると、必ずvertically integrated businessesが求められ、少数の機関や個人によるよりも、もっと中央集権的なcommand and controlが必要とされると考えた点だ。複雑（complexity）は必ずしも、vertical integrationやcentralization（中央集権化）と同義となるとは限らない。確かに、第一次・第二次産業革命では、経済活動のvertical integrationが必要だった。当時のcommunication　 / energy matrixが持つ性質のため、限界費用を下げ、十分な規模の経済を生み出し、投資を回収して利益をあげるためには、経済活動のvertical integrationが必要だった。付言すれば、資本主義と社会主義のどちらの体制下でも、経済活動のvertical integrationが必要だった。ソ連と中国のどちらでも、そしてヨーロッパの混合経済でさえ、経済活動のvertical integrationは見られたのだから。私達は、生産手段の所有権の所在と、生産の組織化（organizing）様式とを混同してはならない。資本主義体制と社会主義体制とでは、確かに所有権所在や利益分配パターンが異なるが、どちらもvertically integrated enterprisesで生産をorganizeしていた。なぜならばその方が、費用対効果（efficiencies）が向上したからだ。

　しかし、限界費用がほぼゼロに向かっている場合、私達はどのように経済をorganizeすれば良いのだろうか？　communication / energy matrixを確立する際の参入コストが、著しく低いので何億もの人々が形成するpeer-to-peer networksによって賄われている場合に、そして、communication, energy, and a growing number of products and servicesを、生み出し、備蓄し、シェアするための限界費用がほぼゼロに向かっている場合に、私達はどのように経済をorganizeすれば良いのだろうか？

　現在、新たなcommunication / energy matrixが出現しつつある。それとともに、a new “smart” public infrastructureも出現しつつある。即ちThe Internet of Things (IoT)は、第一次・第二次産業革命よりも遙かに複雑な新経済パラダイムでもって、全ての人と全てのモノをつなげるだろう。しかもそのarchitectureは中央集権型でなく分権型・権力分散型（distributed rather than centralized）になるはずだ。更に重要なのは、この新経済が、資本主義市場におけるvertically integrated businessesではなく、the Collaborative Commons（協働型コモンズ）におけるlaterally integrated networksによって、the general welfareをoptimizeすることだ。

（齋藤補遺：ここで「the general welfareのoptimize」は、the Collaborative Commons（協働型コモンズ）におけるlaterally integrated networksの活動の副目的副産物だ。主目的主産物は、勿論、「the common goodの実現」にある。）

　とどのつまり、20世紀に見られたcorporate monopoliesは今や、出現しつつあるIoT infrastructuresがもたらす途方もなく驚異的な破壊力に晒されている。他方new types of social enterprisesは容易にIoTにplug and playし、そのopen, distributed, and collaborative architectureを活用することができる。その結果、peer-to-peer lateral economy of scaleを創造し、事実上、残存中間業者を一掃するだろう。この様なcompressionにより、費用対効果（efficiencies）と生産性（productivity）が劇的に改善される一方、限界費用はほぼゼロにまで減少し、goods and services（財とサービス）の生産と分配は、ただ同然で行われる様になる。

　20世紀の第二次産業革命に君臨したvertically integrated monopoliesは、こうした流れを阻止しようと闘っているが、その様な努力は無駄であることが明らかになりつつある。既にこの新たな軍門に降ったのは、例えば、音楽産業、出版産業、活字メディア、電子メディア、娯楽産業（の大部分）、などを差配していたgiant monopoliesだ。これらの者達は限界費用ゼロに向かうpeer production in laterally integrated economies of scale networksによる”shock and awe”（衝撃と畏怖、戦争を短期終結させるための戦略）の脅威を既に身をもって経験した。更にこのIoT infrastructureが成熟すれば、多くのcorporate giantsの破綻が確実に起きるだろう。この破綻は、energy and power generationから、通信、製造、サービスに至るまで様々な分野で確実に起きるだろう。

　実は既に、こうした経済の変化が隅々にまで及びつつあり、人間の持つconsciousness（良心）そのものにとても深遠な変化を起こしつつある。即ちこの新経済パラダイムは、人間の本性（nature）について根本的な再考を迫っている。私達とthe Earth（地上世界、この世）とのrelationshipについて私達はどの様にとらえるべきなのか、これについて根本的な変更を迫っている。Thomas Paine（1737-1809）、このアメリカの偉大な革命思想家はかつて、”every age and generation must be as free to act for itself” [[19]](#footnote-19)、即ち、「どの時代もどの世代も、自らの思うとおりに行動するfreedomがなくてはならない」ときっぱりと述べた。それから二百余年たった現在、新世代人達が、限界費用ゼロ社会の萌芽を育み、worldview（この世観、地上世界観）を根本的に変え、the human journey（この世での人間としての旅）に新たな意味をもたせようとしている。

1. Robert S. Hoyt, *Europe in the Middle Ages*, 2nd ed. (New York: Harcourt, Brace and World, 1966). 300. [↑](#footnote-ref-1)
2. Max Weber, *The Protestant Ethics and the Spirit of Capitalism* (1930; reprint, London: Routledge, 200) [↑](#footnote-ref-2)
3. John Locke, *Two Treaties of Government* (London: Printed for Whitmore and Fenn, Charing Cross; and C. Brown, Duke Street, Lincoln’s-Inn-Fields, 1821) [↑](#footnote-ref-3)
4. ditto [↑](#footnote-ref-4)
5. ditto, section 37. [↑](#footnote-ref-5)
6. Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. Edwin Cannan (London: Methen, 1961) [↑](#footnote-ref-6)
7. R. H. Tawney, *The Acquisitive Society* (New York: Harcourt, Brace, 1920), 13, 18. [↑](#footnote-ref-7)
8. Max Weber, *From Max Weber: Essays in Sociology*, eds. and trans. H. H. Gerth and C. Wright Mills (New York: Oxford University Press, 1946), 51. [↑](#footnote-ref-8)
9. Richard Schatter, *Private Property*: The History of an Idea (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1951), 185. [↑](#footnote-ref-9)
10. David Hume, *An Enquiry Concerning the Principles of Morals* (London: Printed for A. Miller, 1751) [↑](#footnote-ref-10)
11. Schatter, *Private Property*, 242. [↑](#footnote-ref-11)
12. Jeremy Bentham, “Pannominal Fragments ,” in *The Works of Jeremy Bentham, Now First Collected; Under the Superintendence of His Executor, John Bowring – Part IX, ed.* John Bowring (Edinburgh: William Tait, 1839), 221; Jeremy Bentham, “Principles of the Civil Code,” in *The Works of Jeremy Bentham, Now First Collected; Under the Superintendence of His Executor, John Bowring – Part II, ed.* John Bowring (Edinburgh: William Tait, 1839), 309 [↑](#footnote-ref-12)
13. Charles Darwin, *The Decent of Man: And Selection in Relation to Sex*, Project Gutenberg [↑](#footnote-ref-13)
14. ditto. [↑](#footnote-ref-14)
15. Herbert Spencer, *The Principle of Biology* (London: Williams and Norgate, 1864) [↑](#footnote-ref-15)
16. Charles Darwin, *The Variation of Animals and Plants under Domestication* (London: John Murray, 1899) [↑](#footnote-ref-16)
17. Stephen Jay Gould, “Darwin’s Untimely Buria,” in *Philosophy of Biology*, ed. Michael Ruth ( New York: Prometheus Books, 1998), 93-98 [↑](#footnote-ref-17)
18. Janet Broowne, *Charles Darwin: The Power of Place* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2002), [↑](#footnote-ref-18)
19. Thomas Paine, “Rights of Man: Being an Answer to Mr. Bruke’s Attack on the French Revolution,” in *The Political Works of Thomas Paine* (New York: C. Blauchard, 1860) [↑](#footnote-ref-19)